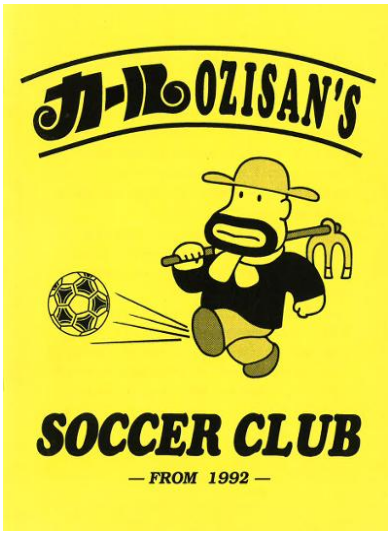
第58回　VICアカデミー

～弊社理念にある「学習と成長」の実践の一つとして開催しています～

「ワールドカップサッカー日本代表かく戦へり」
～地政学・チームビジョン・パフォーマンスからの考察～
講演者：トヨサダ研究所　代表　豊田貞光氏
エロスとアガペー研究者＆冒険家
日時：2026年7月23日（木）17:00～18:30



■ 経歴
1959年　茨城県勝田市（現ひたちなか市）生まれ
茨城県立日立第一高等学校　サッカー部卒業
日本大学　法学部＆ラグビー部卒業
企業勤務を経て
1989年
産業能率大学総合研究所へ入職
事業本部　アドバイザー
サッカーチーム「カールおじさんズ」センターバック
北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）博士後期課程修了
（元）経営管理研究所 主席研究員
（元）経営学部教授
博士（知識科学）ITコーディネータ
日本創造学会 会長



【専門分野】
知識創造経営論
リーダーシップ
プロセスイノベーション
経営人材育成
AIと人間の創造性

■はじめに

今回のワールドカップの優勝国と、ベスト8の顔ぶれを見ると、優勝はスペインで、ベスト8のうち6カ国をヨーロッパが占めた。「ヨーロッパが強い」という前提を押さえたうえで、本日はサッカーを地政学の視点から読み解く。地政学とは、地理的条件が国家戦略や国際関係に与える影響を分析する学問である。これを「地理的条件がサッカーの国家戦略・国際関係に与える影響」と読み替えて話を進める。

■日本代表と地政学的ハンデ、そして黄金世代

かつてのサッカー日本代表は、地政学的にヨーロッパから遠いがゆえに弱いと言われ続けてきた。オリンピックにすら28年間出場できない時代が続き、1998年のフランス大会からようやくワールドカップに出続けられるようになった。

その転機を作ったのが「黄金世代」である。2002年の日韓共催大会に先立つ1999年、日本はワールドユースで準優勝した。中田浩二、小野伸二、本山雅志、高原直泰、稲本潤一、小笠原満男という顔ぶれである。彼らは中学・高校の年代からU-15やU-17の舞台で世界と戦い、「世界はどのくらいのレベルなのか」を肌で知った世代だった。当時の監督が国際経験豊富なトルシエだったことも大きい。この世代からは国際的に活躍する選手が多数生まれ、日本は地政学的ハンデを乗り越える突破口を開いたのである。

第58回　VICアカデミー

■FIFAとマネーの現実

ワールドカップと地政学における最大の問題は、FIFAという組織である。金銭絡みの問題は前会長のブラッター氏の時代から指摘され、現在はインファンティーノ会長の体制が続く。

今回のアメリカ・メキシコ・カナダ大会の収益は約2兆4000億円で、オリンピックの3倍という規模だ。決勝トーナメントのチケットは最低でも180万円、上は750万円ほどで、ダイナミックプライシングにより価格が上下する。平均年収180万円の国であるアルゼンチンのサポーターがどうやってチケットを買っているのか、理解し難い。

次の2030年大会は、第1回大会の優勝国を祝う100周年という名目で、スペイン・ポルトガル・モロッコに、アルゼンチンやパラグアイなど南米を加えた6カ国開催となった。同じ大陸内での開催が連続しないよう、間隔を空ける規定があるため、2034年に開催できる大陸は事実上アジア・オセアニアに絞られ、開催国はサウジアラビアに決まった。サウジアラビアのマネーはFIFAに流れ込んでおり、サウジアラビアが関わるクラブの世界大会は優勝すると1000億円ほどが入る。ワールドカップは、お金に大きく左右される大会になってしまった。

■スーパースター誕生の法則

ペレ、マラドーナ、メッシ、クリスティアーノ・ロナウド、ベッカム。歴代のスーパースターを分析すると、偏見、国家間紛争、経済危機、貧困といった状況からの脱出に成功した時に誕生する傾向がある。スーパースターが偏見や紛争中の場所といった境遇の中から生まれてくるところが、サッカーの面白いところである。これが本日の後半の議論につながる重要な発見だ。

■森保ジャパンの総括

森保監督は8年間、「チーム一丸」「凡事徹底」を掲げてチームを作ってきた。26人中23人が海外組となり、選手個々の実力は確実に上昇した。整理整頓されたロッカーやゴミ拾いは世界中で話題になり、素晴らしい組織文化を育んだと感じる。

ただ、大会前にサッカー協会が公表した表紙の写真は、怪我で離脱した選手と選ばれなかった選手ばかりが監督の周りに固まっており、私は何かを暗示しているように感じていた。

一方で結果は、グループステージ1勝2分け、決勝トーナメント初戦のブラジル戦での敗退だった。

私が疑問に感じたのは、ブラジル戦の選手交代である。大会で唯一出場機会のなかった町野を、あの場面で投入する必要があったのか。「チーム一丸」の哲学が采配にのしかかったと私は見ている。

個人的に、敗因は、戦術40%、体力30%、交代20%、個人能力10%と分析している。試合をAIに分析させると、守備力9.5点、森保監督8.8点という評価だったが、間違った情報も散見されたので、信用度は何ともいえない。

また、日本的な「和」を重んじる集団性に、私は「失敗の本質」で描かれた日本軍の姿を重ねて見てしまった。とあるサッカーファンがSNSに投稿した「ドイツで気持ちよくサッカーをしているだけではだめだ。チャンピオンズリーグの極限で日常的に勝負しなければならない」という分析が、私には一番刺さった。

■私の結論

8年間の総決算として実力は確実に上がったが、世界トップクラスとの差はむしろ広がった。日本にはヨーロッパのビッグクラブの中心選手がいないのである。私の結論は3つだ。第一に、レギュラークラスがビッグクラブの先発になること。第二に、監督・コーチは日本人・外国人にこだわらず、長期的に責任を持たせること。第三に、スター選手ではなくスーパースターを発掘することである。森保監督が浸透させた日本人らしさを軸としたコーチングは維持すべきだ。しかし、このままでは世界標準の選手は生まれても、スーパースターは生まれない。つまり、ワールドカップ優勝を狙えるチームにはなれないと私は考えている。

■スーパースターをどう生むか

最後に「あなたならどうやって日本からスーパースターを発掘するか」を参加者全員に考えてもらった。

「ヨーロッパのクラブに幼少期から送り込む」「移民政策の活用」「貧困層でも稼げる職業としてサッカーを位置づける」「Jリーグの育成体制と欧州への移籍ルートの整備」など、多くの意見が出た。

参考として、メッシの逸話を紹介する。メッシは10歳で成長ホルモンの分泌異常が見つかり、治療費は月に約1000ドル。鉄工所で働く父の収入では払えず、所属クラブも財政難で支援を続けられなくなった。そこで治療費の全額負担を約束したのがバルセロナであり、13歳でスペインに渡った彼は、後にチャンピオンズリーグ優勝4回、リーグ優勝10回、バロンドール8回という実績を残した。

現在日本では、Jリーグの下部組織は月謝が約5万円、遠征費などを含めると年150万円ほどかかり、貧困層には手が届かない。月1万円しか取らないクラブは“浦和レッズ”の一つだけである。

埋もれているスーパースターの予備軍を拾い上げる仕組みこそが必要だ。